

執筆者一覧

安生 恭子 (大阪府立大学)

岩本 篤子 (大阪市立大学非常勤講師)

小倉 博史 (京都外国語大学)

小栗栖 等 (大阪市立大学後期博士課程)

川口 陽子 (神戸大学修士課程)

杉浦由紀子 (大阪市立大学前期博士課程)

穂田久仁子 (大阪市立大学前期博士課程)

福島 祥行 (大阪市立大学後期博士課程)

舟杉 真一 (京都外国語大学非常勤講師)

森本 英夫 (大阪市立大学)

T.L.L.M.F. 創刊号

発行 1990年5月13日

発行所 森本研究室

〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138

[06-605-2455]

印刷 P U L

Travaux de Linguistique et Littérature Médiévale Françaises

目次

発刊の辞

森本英夫

- 1 : 安生 恭子 ● 移動動詞の分類
- 8 : 舟杉 真一 ● 味覚のフランス語
- 15 : 福島 祥行 ● 動的認識構造に於ける ce N の位置
- 22 : 小栗栖 等 ● 武勲詩の起源問題に関する諸主張
- 28 : 川口 陽子 ● 『恋する二人』における固有名詞の使用と不使用
- 35 : 杉浦由紀子 ● 《Escoufle》について
- 41 : 傳田久仁子 ● 概説 MBLUSINE 物語
- 47 : 岩本 篤子 ● *Marie de France* の *Les Lais* における第三変化男性名詞に関して
- 53 : 小倉 博史 ● 固有名詞による成句について(1) — キリシヤ・ロマ語より —
- 60 : 森本 英夫 ● 倒置と代名詞主語 — 13世紀の韻文と散文に見られる主語の例置について —

1990.5

武勲詩の起源問題に関する諸主張

小栗栖 等

『ロランの歌』（以下『ロラン』）他の武勲詩の諸作品が如何なる生成過程を経て現存する諸写本の姿を取るに至ったのかという、所謂起源問題に関する論争は今尚決着を見ていない。本稿では、R. Menéndez Pidalの*La Chanson de Roland et la tradition épique des Francs* (1960) の第一部、第一章に従って、そうした論争の流れを概観して見ることにする。但し、Pidalの所説には今回は一切言及しない。というのも、Aebischerが*Préhistoire et protohistoire du Roland d'Oxford* (1972) で展開する極めて興味深い反論を考慮しつつ、Pidalの「現代伝承主義」の検討を行う事を別の機会に譲りたいからであり、本稿はそうした検討の準備段階として纏められたものだからである。

Gaston Paris: *Histoire poétique de Charlemagne* (1865)

彼によれば、武勲詩は7世紀から10世紀とそれ以降という二段階の生成過程を辿った。即ち、歴史事件と同時代の詩人と歌い手の役割を兼ねた戦士によって、ゲルマン語とロマン語を用いて創出されたカンティレーヌ<cantilène> という、抒情詩的或いは抒情叙事詩的<lyrico-épique> な民衆的な小詩<chant> の文化が10世紀末に消滅し、11世紀には叙事詩文化が完全にそれに取って代わる。その担い手はジョングルールである。彼らは古くから伝わる小詩を整理統合して作り上げた詩に、移り行く世代の嗜好に合致する改作を幾世紀にも亘って加えていったのである。これは、イーリアスやニーベルンゲン等が不均質な元来独立した小詩の寄せ集めであると主張した、ドイツ・ロマン派の流れを汲むものであり、以降、『ロラン』に様々の矛盾、即ちこの作品がやはり独立した生成過程を経た小詩の寄せ集めである証拠が追求されることとなった。

Milà y Fontanals: *De la poesia heroico-popular castellana* (1874)

Pio Rajna: *Le origini dell'epopea francese* (1884)

G. Parisのカンティレーヌという武勲詩の源流は、スペインの民衆詩であるロマンセをモデルに想定したものであった。それに対して、Fontanalsは、スペインのロマンセが、叙事詩の源流であるどころか、元来、貴族階級を対象に一ジョングルールが創出した叙事詩の、やがて民衆の手に委ねられて細分化されたもので

あると反論したのである。続いて、Rajna は、武勲詩がメロヴィンガ朝の時代に既に存在した、一人の詩人によって創出されたゲルマン語叙事詩が、フランク語からロマン語の時代に至るまで改作を加えられてきたものであり、フランスに土着のものではないと主張した。この学説は、G. Paris 自身によっても、全面的に受け入れられるに至った。

Joseph Bédier: *Les légendes épiques* (1908-1913)

Bédierの有名なフォルミュールである「初めに道あり」は、『ロラン』の生成にサン・ジャック・ド・コンポステッラへの巡礼路が深く関わっていることを主張したものである。彼によれば、巡礼路に点綴する聖堂の僧侶が、巡礼者たちにEginhardの*Vita Karoli magni imperatoris* (vers 830)のロランに纏わる記述を語りかつ、捏造した遺物を披露していたところ、それが巡礼を行っていた天才詩人に靈感を与え、『ロラン』が創出されることとなった。それは11世紀末か、若干それ以前のことであり、それ以前に『ロラン』が存在したところでそれは極めて芸術的価値の低いものであった。というのも、G. Parisの主張するような匿名の芸術的意識のない集団による文学的価値のある詩の創出はあり得ないことに思われるからである。それ故、武勲詩にゲルマン的な起源を求める必要はない。この主張を更に押し進めて、Albert Pauphiletは「初めに、詩人あり」というフォルミュールの下に、武勲詩が完全に個人の創作によるもので、それ以前に、聖職者階級による練成も、地方伝説もなかったと主張した。しかし、その後揺り戻しが起こる。Maurice Wilmotteは、ラテン語でギョームらの戦いを語る「ハーク断片 <fragment de la Haye>」がBédierの言う様に1040年以降のものではあり得ず、それは10世紀末のものであるとし、武勲詩の源流をカロリング朝時代のラテン語詩に求めようとした。Bédier自身、武勲詩の起源に、時としてラテン語作品を認め得るとしていたが、*La Chanson de Roland (Commentaires)* (1927)でその仮説に立ち返るに至った。しかし、彼とその友人の綿密な研究は、『ロラン』とラテン語詩の関聯を否定する結論を引き出したのである。そこで、彼としてもオックスフォード本（以下O本）『ロラン』に先立つ俗語で書かれた詩の存在を認めざるを得なくなったが、あくまでそれが個人の創意の所産であると主張し続けたのである。それでも尚、『ロラン』にラテン語文化の影響を立証しようとする動きは見られたが、Italo Sicilianoに言わせれば、それらは寧ろ『ロラン』にラテン語文化の影響のないことをより良く立証したのである。一方、Pauphiletも、その*Sur la Chanson de Roland* (1933)で、O本に先立つ『ロラン』の存在を認めざるを得なかった。というのも、「初めに、道あり」という言葉を否定して、ブライユの墓などのロランに纏わる遺物が、『ロラン』の着想を齎したので

はなく、逆に『ロラン』が遺物の偽造を疑したとするには、0本のそれらへの言及(L.267)が後代の加筆であることを前提せねばならなかったからである。そして後に、彼は11世紀の前半には極めて0本に似た『ロラン』が既に存在していた事を主張するに至ったのである。

Ferdinand Lot: *Etudes sur les légendes épiques françaises* (1926-1928)
全盛期にあった「個人主義理論」に異議を唱えたのは、F. Lotである。彼は、五つの武勲詩についてBédierの理論の正当性を問い、武勲詩の生成への聖職者階級の影響が比較的後代のものであることを立証したのである。例えば、ギョーム系<cycle de Guillaume>の武勲詩群は巡礼路の影響が極めて明確に見られるが、実の所、そのうち最も古いとされる『ギョームの歌』には、そうした影響が全く見られず、また、スペインを舞台とするあらゆる武勲詩には、サン・ジャックの巡礼路への言及が見られるが、唯一つ、最も古い武勲詩である『ロラン』には、それへの言及が見られないのである。つまり、武勲詩が古い時代の歴史事件を語るに、聖職者からの情報提供を想定するわけには行かず、やはり歴史事件を後代に伝える何らかの伝承形態が必要であることになる。Lotは伝承形態が、半ば抒情的、半ば叙事的な「哀歌<complainte>」であると推測したのであるが、そこにはG. Parisの影響を見ることが出来る。彼は、更に後代の研究に影響を与える幾つかの重要な主張をなしている。先ず第一に、今日は980年から1030年という年代に帰属せられる「ハーグ断片」の、はやくとも1040年というBédierによる推定年代に、反論を加えた。また、1066年のヘスティングスの戦いの際に『ロラン』の歌われた事を述べる「イギリス人の物語」が信憑に足るとし、1096年の公文書に残る、オリヴィエとロランという兄弟の名の記録が、既に当時『ロラン』が極めてポピュラーであったことを示すとして、その作品が第一回十字軍より後代の作であるという主張に反論した。更に、0本の1428から1429詩行に示されるフランスの領土が、王朝末期のカロリング王族に貴重であった、10世紀末の小フランキア領域に一致することを指摘したのである。

J.-J. Salverda de Grave: *La Chanson de geste et la ballade* (1927)

Karl Voretzsch: *Spanische und französische Heldendichtung* (1930)

既に今世紀初頭より、フランスの叙事詩とスペインのそれとの近親関係は着目されていたが、20年代後半には、スペインの叙事詩のフランスのそれとに比べ古態であることが研究者の注意を引くことになった。De Graveは、武勲詩とバラードが共に匿名の詩人集団の手になるものであることを主張し、後には、複数のバラードが抒情叙事的な段階を経て統合され、武勲詩が生まれるに至ったと考えた。

一方、Voretzsch も、スペイン叙事詩の研究が、武勲詩の先史を照らし出し得ると考え、Pio Rajna に従って、武勲詩とフランク人の叙事詩伝承との関聯を主張した。更に、G.T.Northup とTheodor Fringsは共に、ロマン語圏の叙事詩の起源を解明するに有効なモデル足り得るのは、フランスの叙事詩ではなく、スペインのそれであると言明したのである。

Robert Fawtier: *La Chanson de Roland* (1933)

René Louis: *De l'Histoire à la légende* (1946)

Rita Lejeune: *La Chanson de Geste et l'Histoire* (1948)

スペイン叙事詩とフランス叙事詩の関聯の考慮は、F. Lotの後継者たちによって引き継がれた。Fawtier は、10世紀より後には卑怯者の武器と見做された弓が、殿軍司令官任命に際してロランに手渡されるのは、0本が部分的には10世紀に成立していた事を示すものであり、ロンスヴォーの事件が同時代から10世紀まで伝わるのは、バラードの形態を取ってであったとした。また、R. Louisも、武勲詩とそれが歌う歴史事件との間に抒情叙事的なバラードの介在を支持し、武勲詩の成立は10世紀のことであり、個人によって創出された諸作品は、引き続き諸詩人の改作の練成を受けたとした。しかし、両者の主張は共に、スペイン文学に余り通じている訳ではないDe Graveのロマンセとスペイン叙事詩の混同をそのまま受け継いでしまったものである。R. Lejeuneは、歴史事件と武勲詩作品の間に不断の伝承が介在していること、しかし、それが叙情詩であれ叙事詩であれ、俗語の詩の存在を意味する訳ではないことを、併せて主張したのである。

Emile Mileaux: *La Chanson de Roland et l'Histoire de France* (1943)

Italo Siciliano: *Le origini delle canzoni di gesta* (1940)

E. Mileaux は、Fawtier に基づいて、『ロラン』は聖職者と詩人の協働の産物ではなく、失墜したカロランジアン政権の同調者の為に、1000年頃に一人の詩人によって創出されたとし、また、I. Sicilianoは、Lotの言う様に8世紀から10世紀の沈黙の間にも叙事詩があったにせよ、それが現存しないのは文学的価値が乏しかったからであり、文学ジャンルとしての武勲詩が現れるのはBédierの言う様に『ロラン』以降であるとして、「個人主義」と「伝承主義」の融和を図った。

Karl Voretzsch: *Alfranzösische Literatur* (1925)

Theodor Frings: *Europäische Heldendichtung* (1938)

当時、武勲詩のゲルマン起源を支持したのは、専らフランス国外の学者たちであった。Voretzschは、9世紀に、恐らく武勲詩と同様のレース形式を持つと考え

られる叙事小詩<chant épique>の存在を立証した。Bertoni は、長いゲルマン詩の時代に引き続く時代に現れた武勲詩がゲルマン起源であることは、具体的論拠を以て、否定する事も肯定する事もできないとした。しかし、Fringsは、ロシアからスペインに至る北部ヨーロッパの諸叙事詩を考察し、それがゲルマン叙事詩文化の拡散であることを主張した。Benedette もまた、テュートン語の叙事詩が、ロマン語のそのの雛形になった可能性は大いにあるとした。

Rita Lejeune: *La naissance*

du couple littéraire (Roland et Olivier) (1950)

中世の公文書の中の、ロラン=オリヴィエという兄弟或いは従兄弟への言及の例は、Lejeune によって、フランスの各地に七例見出され、その最古のものは11世紀初頭のものであり、「伝承主義」に新たな論拠を与えた。

Jules Horrent: *La Chanson de Roland dans les littératures*

française et espagnole au moyen âge (1951)

Horrent は多くの観点を「伝承主義」と共有して、ある異本の文学的優越性は他の諸異本に比べそれが古態である事を必然的に意味する訳ではないということ、伝承とは長年に亘る複数の個人の創意の集積を意味しており、従来考えられてきた様に、改作が作品の芸術的価値と両立し得ない訳ではなく改作こそが伝承作品の生命であることを指摘した。しかし、一方で、0本『ロラン』が改作を受けていると認めつつも、それはバリガン・エピソードのみであり、他の部分は1050年頃に一人の芸術家により完璧な作品の形を与えられたとも主張したのである。

Martin de Riquer: *Los Cantares de gesta franceses* (1952)

Maurice Delbouille: *Sur la genèse de la Chanson de Roland* (1954)

Paul Aebischer: *Rolandiana borealia* (1954)

Riquerは新たに「伝承主義」と「個人主義」の融和を図って、『ロラン』はバリガン・エピソードも含めて、1098年に死んだフェカンのノルマン人僧侶チェロルドゥスが創出したものであるが、彼は様々の伝説に加え、778年の歴史事件の直後に書かれた短い小詩をも参照したと主張した。一方、Delbouilleは「個人主義」を再興した。彼は、0本に先史があることを認めつつ、それが0本の完成とは比較にならぬ幼稚な伝説であり、詩であったと極め付けた。Aebischer も0本が天才の手になることを主張したが、一方で、ノルウェー、スウェーデン、デンマークの写本を検討して、0本が12世紀初頭に競合した諸異本の一つに過ぎないという結論を引き出しもしたのである。

Dámaso Alonso: *La primitiva épica francesa*

a la luz de una nota emilianense (1953)

彼は、19世紀の前半から行方不明になり1953年に再発見された、1065年から1075年という最古の年代を持つ『ロラン』の異本——それは写本の余白に為された僅か十七行のラテン語の書き込みであるが——である「サン＝ミラン賞書」を刊行すると同時に、そこに現れる固有名詞の語尾を詳細に検討してそれがロマン語の詩に基づいて書かれたものであると断定した。

Pierre Le Gentil: *La Chanson de Roland* (1955), *A propos de*

l'origine des chansons de geste: le problème de l'auteur (1955)

彼もまた「伝承主義」と「個人主義」の融和を企てた。彼によれば、叙事詩も叙情詩と同様に潜在的な醸成の段階を踏むのであり、その際、匿名の相次ぐ、或いは同時の複数の詩人による改作の練成を受け、多くの異本が生み出されもする。『ロラン』に関しても、そうした状態が長らく続いたのであり、11世紀から12世紀の前半に、終に武勲詩が文学ジャンルとして成立するに至る。即ち、『ロラン』は嘗てと比較にならない程の完成の域に達したのである。彼は最初、それがテュロルドゥスの手による最初の一詩行から最後の一詩行に至るまでの『ロラン』の新規の編成であったと考えたのであるが、1955年にパンプロナで開かれた「ロンスヴォー会議<Colloques de Roncevaux>」では、もはや、それが唯一の詩人の手によるものであったか、複数の詩人の手によるものであったかは問題にせず、『ロラン』の完成が累積された改作の産物であり、そしてその改作の連続がある日突如として『ロラン』に比類ない詩的価値を与え得たのだと言うことを主眼に据えたのである。

以上が、1950年代までの起源論争のあらましである。少なくとも50年代の時点では、両者の差異が美学的判断に大きく依存していることが分かる。つまり、0本『ロラン』が、たとえ詩の形での先史を持つにせよ、0本の時点で初めて、『ロラン』が文学足り得るようになったのか、ひいては武勲詩が文学ジャンル足り得る様になったのかが、論争の中で極めて大きな位置を占めるようになってきたと言えるのである。ビダルは、もはや起源問題に関するあらゆる主張が「伝承主義」の色彩を多少とも帯びずにはすまされないと言う。しかし、逆に言えば「個人主義」の色彩が払拭され得ないことをもビダルの言葉は表しているのであって、もはや50年代の時点で既に「個人主義」と「伝承主義」の区別は無意味になっていたとも言えるのである。そのことは、ビダルの「現代伝承主義」の検討の際にも検証されるであろう。